

第1回

きしめん

誰にでもある

逆むけ

のこと

後編



その週の土曜日昼十二時過ぎ、喫茶ユトリ口はランチタイムの忙しさの中にあつた。

「お待たせしました」

ユトリ口名物の玉子サンドを客のテーブルに置いたのは、龍だった。敦子が買い物に出ているので、急遽店の手伝いをするようになったのだ。

「にいちゃん、お水ちよ」

隣のテーブルから声がかかる。

「あ、はい。ただいま」

冷たい水の入ったポットを手に移動する。店が狭いので移動は短いが、それでも慣れない彼の動きは無駄が多い。ピークを過ぎて客がいなくなつた頃には、もうへとへとになっていた。

「……駄目だ俺、体力なさすぎ」

空いた席に座り込み、息をつく。

「ばあちゃん、よくこんな仕事をずっと続けられるよな」

コップの冷水を一気に呷る。あお

「じいちゃんも、あれだけの料理、よくひとりでこなせるね」

「慣れとるでな」

店の奥の正直は、短く答えた。

「おまえも昼にするか。何が食べたい？」

「あ、じゃあオムライス」

龍がそう言ったとき、店の扉が開いて敦子が入ってきた。

「ごめんねえ、忙しいときにおらんで。大丈夫だった？」

「まあ、なんとか。ばあちゃんは買い物済んだ？」

「おかげさんでね。これ、お土産」

そう言って差し出したのは高島屋のペーパーバッグだった。中から出てきた紙箱を見て、珍しく

正直が声を上げる。

「不朽園ふきゆうえんの菊最中きくもか」

「久しぶりに買ってみたんだわ。あんた、これ好きだったもんねえ」

見ると、いつも真一文字に結んでいる正直の口くち

許もとが少し緩んでいる。よほどの好物らしい。

「ほれ、龍も食べやあ」

渡されたのは菊の花を象かたどった最中だった。手に持つと、結構重みがある。

「いただきます」

口に入れると皮がぱりつ、と崩れ、柔らかな餡あんが舌に乗る。

「あ、美味しい」

思わず声が出た。

見ると正直は一口で最中を半分頬張っている。すぐに残りも口に入れ、さらにもう一個へと手を伸ばそうとする。

「あんた、全部食べたらかんよ。母ちゃんにもやらなかんで」

「わかつとる」

そう言いながら正直はふたつめを頬張った。本当に好きなんだな、と龍は微笑ましく思った。

そのとき、店の扉が開いてひとりの女性が入ってきた。その姿を見て、龍は硬直した。

「あ」

「あ」

入ってきた女性も龍を見て立ち竦む。

「いらっしやい」

声をかけた敦子も、ふたりの様子を見て怪訝けげんそうに、

「どうしたの龍、お知り合い？」

「あ、うん」

そう言ってから、彼女に訊いた。

「もしかして、偶然ですか」

「違います。鏡味さんに会いに来ました」

「どなたさん？」

再び敦子が訊く。

「あ、えっと、平野里央さん。雑誌の編集をしているひと」

「雑誌の記者さんかね」

「そうです。龍さんにはお世話になってます」

里央は敦子に向かって頭を下げた。

「お世話？　どんな？」

「ああ、ちょっとね」

龍は慌てて誤魔化した。じつは「DAGAN

E！」で仕事をしたことは、まだ話していなかったのだ。

「会いに来たって、僕に何か？」

「謝ろうと思つて。この前、失礼なことしちゃつたから。すみませんでした」

里央は龍に頭を下げた。

「あんなふうにいきなり帰っちゃつて、気分悪くしちゃつたでしょうね。ほんと、わたしって身勝手。でも、ちゃんと説明したいんです。聞いてもらえますか？」

「あ、ええ」

頷いてから、

「とりあえず、座りませんか」

里央を座らせ、自分はその向かいに腰を下ろす。敦子がすかさず里央の前に水の入ったコップを置いた。

「ありがとうございます」

「何か飲まれますか？」

「じゃあ、レモンティーをお願いします」

そう言ってから、彼女は龍に向き直った。

「わたし、じつは大学を出るまで、この近くに住んでました」

「あ、そうなんですか」

「ええ、だから駅西あたりのことはよく知ってます。このユトリロのことも、入ったことはなかったですけど知ってました。近くに子供の頃からよく通っているお店もありました。特に好きだったのが、つぼうち屋さんでした」

「つぼうち屋……」

「うどんも丼物も美味しかった。でも一番好きだったのは、きしめんでした。麺がつるつるしてて、食べ応えがあつて。つゆも好きだったなあ。だしの香りがふわって広がるんです。今でもあの店のきしめんの味、覚えてます。お店のひとも好きでした。あの店では旦那さんが麺を打って、それを奥さんが茹でてたんですよ。いつも夫婦一緒にその働きぶりを見るのも愉たのしみでした」

思い出を語るように、里央は言った。

「坪内さんの御夫婦もわたしのことをかわいがってくれてて、わたしがお店に行くと話しかけてく

れたりしてました。きしめんを食べてるといつも『美味しい?』って訊いてきて、わたしが『美味しい』って言うのと喜んでくれて。ほんと、親戚みたいな付き合いだっただんです。大学に合格したときも自分の娘が合格したみたいに喜んでくれて。

嬉うれしかったな。でも大学に通うようになるといういろと忙しくなって、なかなかお店に行くことができなくなりました。久しぶりに行ったのは二〇一一年の十月だったと思います。もちろんきしめんを頼みました。でも出てきたきしめんを食べたとき、なんだか違和感があったんです。麺がなんというか……ちよっとゆるいような」

「ゆるい?」

「柔らかいというのでもないんです。うまく説明できないんですけど、いつもと違う。こんな感じですよ。それで奥さんが出てきて『美味しい?』って訊いてきたとき、つい『なんかいつもと違う』って言っちゃったんです。そしたら奥さんが急に怖い顔になって『うちはいつも同じものを出してるんだよ!』って怒られちゃったんです。わたし、



奥さんにあんな言われかたをされたの初めてで、ちよつとびっくりしちやつて。それで早々に店を出てしまいました」

そこまで話したとき、敦子がレモンティーをテーブルに置いた。里央はそれを一口啜って、

「つぼうち屋さんが火事になったのは、その二日後でした」

そう言った。

「奥さんのお葬式にも参列しました。ご主人、本当に悲しそうでした。わたし、言葉もかけられなかった。飾られていた遺影の奥さんは、とても優しそうに微笑んでました。でもわたし、あのときのすごく怒った顔の奥さんが忘れられなくて……。そのことが、ずっと頭に残ってました。それで、この前の話です。鏡味さんが教えてくれたつぼうち屋のきしめんの話」

「何のこと?」

敦子が尋ねてくる。

「ほら、岡田さんが話してたでしょ。つぼうち屋の奥さんがきしめんをごみ箱に捨ててたって」

「ああ、あれかね」

「その話、わたしがきしめんのことで奥さんに怒られた翌日のことなんですよ。それを聞いて、はっとしたんです。もしかして、それってわたしのせいだったんじゃないかって」

里央は思いつめたような表情で、

「わたしがきしめんの茹でかたに難癖を付けたから、奥さんが店を閉めてまで茹でかたを練習し直した。それで茹でたきしめんが大量に捨てられた。そう思ったんです。まさか翌日に火事が起きて亡くなるなんて知らなかったでしょうけど、だとしたら、亡くなる直前まで奥さんの気持ちは穏やかじゃなかったかもしれない。ずっと茹でかたに拘こたわって、その最中に死んでしまった。もしそうだったらと思うと、わたしなんだか居たたまれない気持ちになって……それでわたし、鏡味さんを置いて帰っちゃったんです。本当にごめんなさい」

「いや、謝らなくてもいいですって」

龍は慌てて言う。

「それに……坪内さんのことも、多分そんなに気

にしなくてもいいと思うし」

「いえ、気になります」

里央は頑かたくなに言った。

「亡くなる直前に厭いやな思いをさせてしまったんだとしたら、本当に申しわけないし」

肩を落としている彼女の姿を見ると、龍のほう  
が居たたまれない気持ちになってくる。

どうしたらいいのだろう。

「ばあちゃん、坪内さんの奥さんのこと、知ってる?」

「知つとるといえば知つとるし、でも、そんなに親しい間柄ではなかったけどね」

「どんなひとだった?」

「そうだねえ……まあ、仕事熱心なひとだったと思うよ。いつもにこにこしてって、商売に励んどったわ……あ、そうそう、つぼうち屋のことならわたしよりお父さんのほうがよう知つとるでしょ。ねえ?」

と店の奥に声をかける。返ってくるのは、無言の返答だった。

「じいちゃんのほうが親しかったの?」

「坪内さんの旦那さんと何回かゴルフに行つたもん」

「ゴルフ? じいちゃん、ゴルフするの?」

「若いときだけだったけどね」

と、奥から正直が出てきた。何か話すのかと思つたが、彼は店のカウンターにある電話の受話器を手に取り、ボタンをプッシュした。

「……もしもし? 俺だ。ユトリ口の鏡味だ。あ、久しぶりだな」

その後、みんなに背を向けて何か話していたが、やがて受話器を下ろすと、龍に言った。

「今から、坪内のところに行け」

「……え?」

「話をつけた。直接訊いてこい」

「きしめんのこと?」

「そういうのは、放っておくとしこりになる。はつきりさせておけ」

そう言うと、また店の奥に戻っていった。

龍は少しばかり当惑しながら、祖母の顔を見た。

「そうしやあ」

敦子は言った。

「そちらのひとも、安心あんきになったほうがええしな」

そちらのひと——里央は顔を上げた。そして龍に言う。

「行きましょう」

龍にはもう、他の選択肢はなかった。

坪内達司の家は喫茶ユトリ口から歩いて十分ほどのところにあった。このあたりでは珍しい平屋建ての一軒家だ。火事で建て直したので見た目はまだ新しかったが、龍はその家に、どこか虚ろな雰囲気を感じた。

玄関の前に立つと、里央は少し緊張したような面持ちで龍に言った。

「本当に、いいんでしょうか。わたし、身勝手なことをしてるんじゃないでしょうか」

「……そうですね、身勝手なことかもしれませんが」

龍は考え考え、答えた。

「坪内さんには辛いことを思い出させてしまいませんしね。それに、僕の想像どおりなら、かなりプライベートなこと踏み込むことになるかもしれない」

「想像どおりならって、何かわかってるんです

か」

「だから、想像です。もしかしたら坪内さんの奥さんは……いや、まず話を聞きましょう」

龍はインターフォンのボタンを押した。

——…はい。

男の声が返ってくる。

「あの、喫茶ユトリ口の鏡味の孫です」

——ああ、正直さんとこの。ちょっと待ってな。

しばらくしてドアが開く。姿を見せたのは、七十歳過ぎくらいの男性だった。身長は百六十センチ程度だろうか。ほっそりとしていて、頬などがかなり瘦これている分、頭の鉢は大きく見え、顔立ちを逆三角形にしていた。髪は薄く白い。銀縁の眼鏡を掛け、毛玉の付いた鼠色ねずみいろのセーターを着ていた。

「あんたが鏡味さんのところのお孫さんかね？」

男性——坪内達司は龍の顔を見るなり、訊いてくる。

「あ、はい。そうです」

「似とるなあ。よお似とる。若い頃の正直さんにそっくりだわ」

坪内は金歯を剥き出しにして笑った。

「それで、そっちのお嬢さんは……あれ、平野さんとこの里央ちゃんか」

「はい、ご無沙汰ぶさたしてます」

里央は頭を下げる。

「まあまあ、きれいになったなあ。今日はどうしたんかね、ふたりで」

「あの、鏡味さんと一緒にお話を聞きたくて」

「なんだ、夫婦かね」

「違います」

「違います」

龍と里央は声を合せて否定する。

「そうかね。まあええわ。ささ、入ってちよ。狭い家だけだよ」

誘われ、家に入る。掃除は行き届いているようで三和土たたくにも廊下ほこりにも埃などはなく、積み上げられたごみの類たぐいも見えなかった。

通された居間らしき部屋も、きれいに片付いて



いた。ただ、物がほとんどない。テレビと電話と座卓があるだけだ。坪内は龍と里央をその座卓の前に座らせた。

「客が来ることなんかしないで、湯飲みとかも用意したらんのだわ。これで我慢したってちょ」

出されたのは紙コップと緑茶のペットボトルだった。

「最近は自分で茶を沸かすのも面倒だで、こればっかだわ。今時の茶は自分で淹れるより美味しいよ。そう思わん？」

「え、ええ。そうですね」

紙コップを受け取りながら言葉を返す。同じくコップを渡された里央は、まだ緊張しているようだ。

「里央ちゃん、立派になったなあ。もう大学は卒業したんか」

「はい、今は『DAGANE!』っていう雑誌の編集部に勤めてます」

「ほお、雑誌の編集？ そんな仕事に就いとるのか。その雑誌、本屋に売っとるのかね？」

「いえ、ウェブだけなんで」

「うえぶ？」

「インターネットです」

「ああ、インターネットか。それはかんわ。わし、ネットとか全然わからんでよ。まあええわ。それで今日は何の用で来たんかね？」

「それなんですけど——」

「わたし、おじさんに謝りたいんです」

龍の言葉を遮って、里央が言った。

「おばさんを傷つけちゃったこと、謝りたいんです。ごめんなさい」

その場で彼女は頭を下げた。

「それ、一体全体、何の話だね？」

きよとんとした顔で坪内が訊く。

「俺から説明させてください」

龍は言った。

「平野さん、いいですね？」

彼の問いかけに、里央は頷く。

そして龍は、里央と房子の間にあった出来事と、その翌日に美和子が見かけた房子の行動について

話した。

「平野さんは自分がきしめんの出来にクレームを付けたせいで房子さんが怒って、翌日に店を閉めて麵の茹でかたを試し、大量のきしめんをゴミ箱に捨てた、と考えています。そして、そんな思いをさせたまま房子さんが亡くなったことに後悔の念を抱いているんです。でも俺は、ちよつと違うんじゃないかと思ってます」

「違うって、何が？」

里央の問いかけに、龍は言葉を選びながら、

「その……こう言ったら何ですけど、問題は房子さんのほうにあったんじゃないかって」

言いながら座卓の向こう側に座る坪内に視線を向ける。

「平野さんの話では、房子さんはとても優しく、急に怒ったりするようなひとではなかったようです。他のひとの話でも、やはりその印象は変わりません。でもあの日、房子さんは平野さんの言葉に過剰に怒りだした。最初はその話を聞いて、逆むけに引っかかったんじゃないかと思いました」

「逆むけ？ 何だねそれ？」

坪内が訊く。

「触れられたくない話題とかのことです。平野さんの指摘は『きしめんがゆるく感じる』というものでした。房子さんは、そのことを言われたいなかつた。つまり、そのことをずっと気にしていた。そういうことではないかと思っただんです」

坪内は頷きもせず、龍の話の聞いていている。この先はもつと繊細な部分に触れなければならぬ。躊躇ちゆうちよしていたが、今更もうやめられなかつた。

「平野さんはきしめんの茹でかたに問題があつたから、房子さんは何度も茹でかたを試していた、と考えました。でも、俺はそうじゃないと思いません。茹でる以前、麺を打つときに問題があつたんじゃないかと」

そう言うてから、龍は坪内の様子を窺うかがつた。やはり黙っている。しかたがない。龍は尋ねた。

「もしかして坪内さん、あの頃あなたは麺をちゃんと打てなくなっていたんじゃないですか。それでいつもの味わいとは違ってしまった。久しぶり

に食べにきた平野さんには、その違いがすぐにはわかった。でも房子さんも、そのことに気付いていた。だから指摘されて逆上してしまった。そして、茹でかたで麺の変化をカバーできないかと考え、翌日は店を閉めて茹で加減の調整を試みた。でもうまくいかなくて、大量のきしめんを捨てることになってしまった。そういうことではないでしょうか」

龍が言葉を切ると、坪内は紙コップの茶を一口啜り、答えた。

「あなたの言うとおりでわ。みんな、わしのせいだて」

「おじさん……」

「麺を打つてのは、結構力のいる仕事なんだわ。体全体を使ってな。若い頃は勢いでやっとなだけど、歳を取るといかんわ、力が入れえへん。どんどんゆるくなる。だから麺もゆるくなる」

里央は、はっとした表情になる。

「特にきしめんはな、平たくせなかなんで、手打ちは難しいんだわ。わしはいつもどおり打つとるつ

もりだったけど、できあがったものは違っとった。そのことに誰よりもよお氣付いとったのが、女房だわ。あれが茹でとったで、わかつたんだらうな。でもわしには何にも言わんと、茹で加減で工夫しようとしとったみたいだわ。でも、それだけじゃ繕いきれんところに来とった。客にわかつてまうくらいにな」

「やっぱり、わたしが指摘したから……」

「里央ちゃんだけでなくて、常連のお客さんからも言われるようになってとったんだわ。最近なんか麵が不味まずくなったとな。それである日、一日休んで茹でかたを試してみただて。何回も何回も茹でてな。でも、納得できるものにはならなかった。女房は自分の責任みたいに思って、必死だったわ。全部、わしのせいなのにな」

美和子が見た房子の鬼の表情とは、その必死さの現れだったのか。龍は得心した。

「次の日も女房は朝から茹で加減を試そうと厨房ちゆうぼうに入った。そしてコンロに火を入れた瞬間、どかんと来た」

坪内は俯うつむき、茶を啜すすった。

「後で消防署が来て検証したらよ、前の日に元栓をちゃんと閉めとらんかったせいでガス漏れしとったらしい。いつも火の元には充分気を付けとった女房が、あの日はうっかりしとったんだ。それだけ茹でかたに気を取られとったんだな。全部、わしのせいだわ」

そう言つて、里央を見た。

「だからな、里央ちゃんのせいでない。それだけわかつてちょ」

「おじさん……」

里央は膝ひざの上で両手を握りしめていた。その様子ようすを龍は、ただ黙って見ていることしか出来なかつた。

坪内の家の前で里央と別れ、龍は喫茶ユトリロに戻ってきた。

「龍ちゃん龍ちゃん」

店に入るなり、声をかけられた。岡田夫妻が来ている。玉子サンドを食べていたようだ。

「ちようどいいとこに来たわ。この前の話だけど  
な」

美和子が急に言い出した。

「ほら、坪内さんとこの奥さんがきしめんをごみ箱に捨てとった話」

「ああ、あれは……」

言いかけて、口籠くちかごもった。ここで言っているものかどうか躊躇したのだ。しかし、

「旦那さんが麺をちゃんと打てんようになったで、奥さんが茹でかたを変えようとして研究しとったんだと」

美和子は、あっさりと言った。



「え……それ、どこで聞いたんですか」

「マスターに聞いたんだわ」

「マスター……じいちゃん？」

思わず店の奥に眼を向ける。正直はコーヒー豆の選別をしていた。

「じいちゃん、知ってたの？」

「達司さんに教えてもらったからな」

豆から視線を移すことなく、正直は言った。

「別に秘密でも何でもない。達司さんはみんなに話しとる。知つとるひとは多い」

「だったらこの前、なんで教えてくれんかったの？」

美和子が不満を洩らすと、

「栄一さんと同じ意見だったからな。わからんことを、わからんままにするしかないときもある。

それでいいと思つとった」

「じゃあ、なんで今になって話したんかね？」

「理由はないよ」

そう言つて、振り返り、龍を見た。

「どうして俺と平野さんを、わざわざ坪内さんの

ところに行かせたの？　じいちゃん知ってたなら、話してくれればよかったのに」

「直接、達司さんに聞いたほうがいいと思ったからだ。そのほうがよかっただろ？」

「……うん」

「そういうことだ」

正直はコーヒー豆を入れた缶を置く。

「さっき、昼飯食べ損ねただろ。オムライスだったな？」

「あ、うん」

龍が頷くと、祖父は調理にかかった。

「坪内さんとも、かわいそうだったわねえ」

美和子が言った。

「あんなふうに奥さんを亡くして。ご主人も麵を打てんようになって。不幸続きだったんだわねえ」

「そうでもないな」

ぼつり、と栄一が言った。

「最後まで、ええ夫婦だったんでないかな」

「何言っとるの、あんた」

美和子は夫の言葉をとがめる。

「死んでまったら、おしまいだがね」

そうだろうか、と龍は思った。

先程、話を聞いた後で坪内達司は龍と里央を居間の隣の部屋に案内した。そこには仏壇と遺影が置かれていた。

写真の中の坪内房子は、ふくよかな笑みを浮かべていた。

「おばさん……」

里央は写真を見つめ、言葉を呑み込んだ。

「もうすぐ、この家ともおさらばだわ」

坪内は言った。

「でも、別に寂しくはない。女房と一緒に行くからな」

そして一冊のアルバムを見せてくれた。つぼうち屋の開店からの写真が貼られている。店の外観、店内の様子、そして厨房で働く若い頃の坪内夫妻の姿も写っていた。

「誰かが覚えとるかぎり、人は死なん。女房はずっと、わしと一緒にだわ」

ずっと、一緒。そんな相手がいるというのは、とても幸せなことだな。龍はそう思った。

「あんた、わたしが死んだら清々するでしょうに」

美和子の声が龍を我に返らせる。

「そうでもない」

ぽつり、と栄一が言った。

「静かすぎるのも、好きでないで」

「何、その言いかた」

「まあまあ、それくらいにしときゃあ」

敦子が間に入った。

「夫婦なんて、いろいろだて」

「でも敦子さん、このひと冷たすぎるて。まるで

わたしが騒がしいだけみたいに」

なおも美和子は不満を洩らす。その様子を見て、龍はなんだか微笑ましく思えた。

厨房からいい匂いが漂ってくる。オムライスの匂いだ。

龍はその匂いを、静かに受け取った。